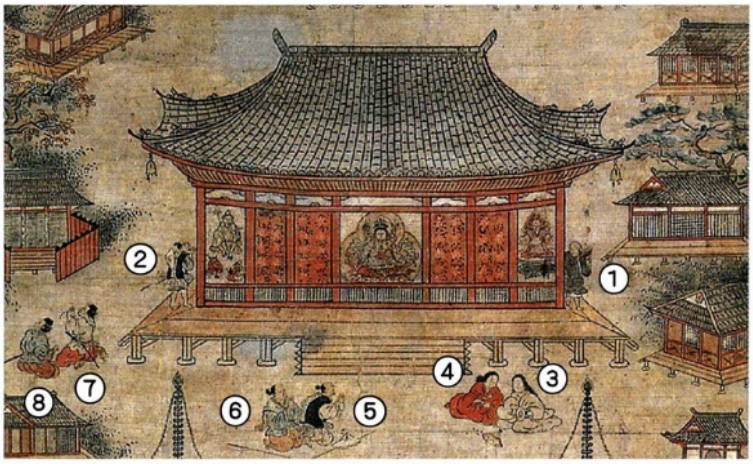
24.葛井寺参詣曼荼羅絵図を解く（2/2）

３．参詣曼荼羅の 27 人の人物像について



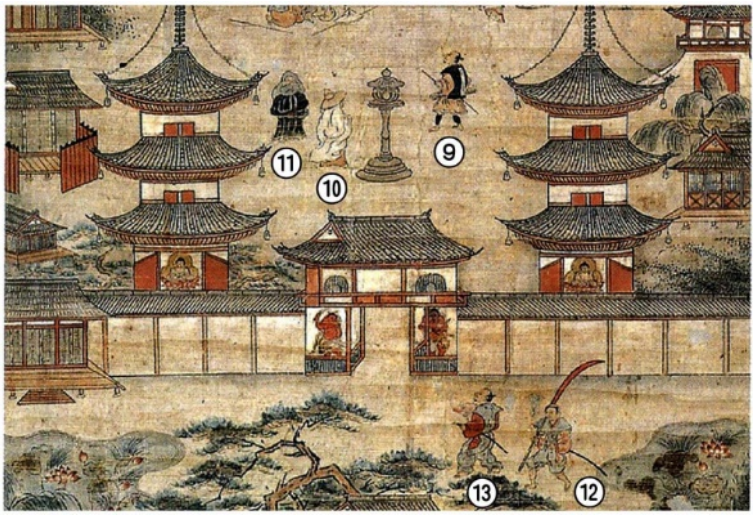
①本堂の右側（東縁）で黒染めの衣を着て法螺貝を吹いている一人の僧がいるが金峰山か葛城山の山伏の一人であろうか？それとも山伏持っている法螺貝を借りて一寸吹いてみようとしている葛井寺の若い僧の戯れた光景なのであろうか？

②本堂の左脇で柱に落書きをしている巡礼者がいるがこれは巡礼札を打ち付けているわけではない。
　他の寺社の絵図にも落書きをする図像が見いだせる。

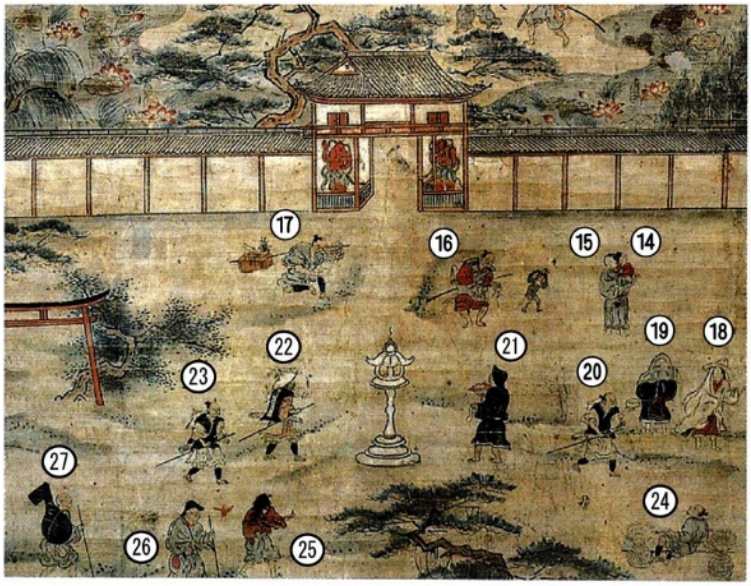
③④本堂階段下に二人の女性が見られ、地面に座って何やら周りを伺いながら、白衣の女性は左膝に置いた鼓を右手で打ち鳴らしており、もう一人の赤衣の女性は右手に扇子を持って何やら喋っている風情に見え、二人の前に扇子を広げ、10 個ほどの小石大のものが散らばっている。二人の女性はともに垂れ髪で着物が旅の装束でもなさそうなので、何か特別の仕事を持った者たちであろうか？
「社寺参詣曼荼羅」の解説ではこの二人を巫女か盲人芸能者らしい女性とし、扇子の上に散らばっているのは、米粒で、米占いの託宣をしている光景だろうとしている。

⑤⑥本堂前正面左に座った二人の巡礼が見える。たった今しがた葛井寺に到着したのであろうか？杖と笠を地面に置き、筵（むしろ）を広げて座り合掌して、一心に千手観音にお祈りしている。

⑦⑧本堂前左端で起座して参拝している、二人の修験者（山伏）。一人は念珠を両手ですり合わせるようにして合掌しており、もう一人は右手に扇子を握って跪座している。二人とも黒色の頭巾をかぶり、結袈裟を肩にかけ、腰に刀を差し、白衣に朱袴といった出で立ちである。よく見ると合掌する男性の腰には腰当らしいものがぶら下がっている。この姿は熊野入峰に赴いた山伏によく似ている。



⑨本堂前の灯篭の右にも杖をつき、筵（むしろ）を抱えて本堂の方へ歩いて行く巡礼がいる。
⑩⑪その左側に市女笠をかぶって後ろ向きに立つ女性と、そのお供らしい黒い着物を着た二人ずれの女性が描かれている。この二人は参詣人であろう。
⑫⑬右端の蓮池から中門に向かって武士とお供の少年の姿が見える。裃をつけて刀を腰に差し、右手で扇をあおっている武士の後ろから大薙刀を肩にかつぎ、おおきな刀を腰に差した少年の従者が付き添っていく。これも参詣者なのであろう。



⑭⑮南門の前の右側に猿回しを見物している母子の姿が見える。
⑯猿回しの猿の頭に犬か馬か判然としないが動物の頭部らしいものを掲げて、二本足で立って芸を見せている。今も昔も変わらぬ門前の風景である。
⑰猿回しの左側に門前で黒い脚絆を結び直している行商人らしい男性が天秤棒の両端に籠と木箱を吊るしたものが置いてあり、これから商売を始めようというのであろうか？
⑱⑲⑳南門出て灯篭の右側に逃げ腰の二人ずれの女性に物乞いを強要する巡礼の姿が見られる。
二人ずれの女性は本堂前灯篭横⑩⑪に描かれた女性の姿とよく似た装束に描かれている。
巡礼の男性も他の男性とよく似た姿であるが、曲物を差し出して物乞いする光景と背中に笈摺（衣服の擦れるのを防ぐ一重の袖なし）を背負っているのが珍しい。
㉑灯篭の右には黒色の被り物に黒染めの衣を着て、左手に念珠、右手に扇子を広げ持って歩いていく僧侶の姿が見られる。高野聖のような人物なのか、俗に鉦叩き（中世の大道芸の一種）と称される人物なのか、定かには出来ない。
㉒㉓この僧と向き合うように二人ずれの巡礼の男性の姿がある。笠をかぶり、杖をつき、腰にござを下げ吊るして、巡礼帷子を着て、脚絆をはき、わらじ履きである。
㉔下段の右端にわらの俵を吊るした天秤棒に腰をかけて休息している農夫らしい男性の姿がある。
㉕㉖㉗下段左端には琵琶法師の一行、三人ずれの姿が見える。赤い上衣を着た先導役の男性の後から、黒い被り者に両手に杖をついている盲目らしい男性と、琵琶の入った大きな黒い袋を肩に担ぎ、右手に杖をつい

て従っていく男性たちである。鎌倉時代の絵巻物に登場してから琵琶法師は二人ずれで描かれるのが通例である。しかもその場合殆どが犬と組合せて描かれており、犬が琵琶法師に吠え掛かっている場面が描かれている。おそらく琵琶法師に対する中世人の複雑な心境―特別な能力で神仏に仕えた異人に対する畏怖と賤視（せんし）の両義的な感覚である。

４．総括

以上 27 人が葛井寺参詣曼荼羅に描かれている人物である。
画面が小さいので登場人物が少数で職種も多くはなく、一般的な参詣曼荼羅に見られるごとき寺の縁起とか、霊験利生の物語などに関する光景が全く描かれていない所が注目される。
絵画的にも建物の配置、描写といい、巡礼や物売り、琵琶法師などの人物といい、参詣曼荼羅としては、はなはだ淡白な表現に終始している点が特色といえよう。
この参詣曼荼羅で当時の藤井寺の様相が何となく少しですが垣間見えたように思います。
きっとのんびりしていて、遠くから来た人達を暖かく迎えていたことだと思います。猿回しの場面は現在の道明寺天満宮での様相と同じで５00 年経過しても変わっていませんね。
この時の勧進でどれほどの貴賤が集められたのか？皆さんそれぞれ独自の発想で当時を想像し楽しんでみて下さい。　　＜以　上＞

（2021.12　赤木）